

早稲田大学博士論文(概要)		
2011	学位記	文科省報告
5693		甲 3372

「坂口安吾研究——一九三〇年代から五〇年代における展開——」概要

宮澤隆義

本論文は、坂口安吾（一九〇六—一九五五）の発表した作品をおおよそ時代順に論じてゆくことで、それらに通底している問題意識の反復あるいは変奏を読みとりつつ、それらが執筆された時代の事象とどのような関わりを持っていたかを探索する試みとして書かれている。

安吾が作家として本格的な執筆活動を行なっていたのは、一九三〇年代から五〇年代の間であった。この時期、ソビエト連邦の影響力や第二次世界大戦、朝鮮戦争から冷戦の本格的な成立まで、世界的に見ても大きな事象が立続けに起き、日本も戦時体制から敗戦を経て戦後の占領期へ至る激変の時代であったことは、改めて指摘するまでもない。本論の中では、安吾の文章に読みとれるこれらの事象との対峙・影響関係が扱われている。そのため、各章ごとに様々なテーマを扱っているが、本論では安吾の作品内に一貫して反響しているモチーフとしては「主体化」という問題を設定している。

坂口安吾自身が「主体」という言葉を用いていることは管見の限り確認できない。だがそれは、当時の「主体」に関する議論に安吾が不満足であったことを意味していると考えられることは可能であるだろう。そこで、本論では「主体」ではなく「主体化」というプロセスの問題を、前者と後者で異なる意味合いの概念として用いている。「主体」は思考において主体が存在し得ることを確認する地点からあらかじめ構築されているが、「主体化」はむしろ思考の変容の過程そのものの運動として考えられる。本論が坂口安吾の文章において駆動していると考え、論じてきたのはこの「主体化」の運動の問題である。

「序論」においてはまず、安吾の作品にしばしば見られる「矛盾」や「逆説」といったテーマを、まさにこの「主体化」の運動からすれば問題となる主題として考え、同時代の小林秀雄と中野重治の文章と並べてみることでその特徴を際立たせることを試みた。小林や中野にとつて「逆説」や「矛盾」といったテーマは、文芸批評の確立やマルクス主義のテーゼと切り離せない問題として語られていた。それに対して安吾においては、それは「ファルス」というテーマにおける世界の諸事象の全肯定と、そこにおける認識の変容への要請を、「主体化」の運動の原動力として見なすことができると考えられることについて述べている。

第一章の「ファルスの詩学——坂口安吾と「観念」の問題——」においては、序論で語られたようなテーマが、文学論である「FARCE に就く」（『青い馬』、一九三二年三月）や、東洋大学学生時代に書かれた時間についてのアフォリズム的な論考である「意識と時間との関係」（『涅槃』、一九二七年三月）といった、安吾の作家活動以前や初期の文章から既に見られることについて触れ、安吾のファルス（茶番劇）論について論じている。

そもそも安吾が用いる語彙の意味はあまり一般的な意味合いを付与されていると考えられないものが多く、「観念」という語はその内の一つである。彼が用いる「観念」と

いう語には、「抽象性」という一般的な意味では使われていないことを述べ、そこには、友人の菱山修三を経由したヴァレリーの「言葉」に対する問題意識の影響が透けて見えることを指摘した。

そして、安吾が意図する「観念」という語には、「意識と時間との関係」における時間論から推測するに、「ある状態から外部と接触することによって存在を刷新すること」という意味合いが込められていることを示唆した。それは、自同律からの離脱として、常に新たな「対象」によって時間性を発生させてゆく、絶えざる自己の変容としての運動と結びついているのである。そこから安吾にとって「観念」とは、既存の認識から逃れ出て「個体」的な「実在」の新たな質を見出すための「反逆」的な方法、すなわち思惟のエコノミーに抵抗するための方法として、常に必要とされていたものであると結論づけた。この、時間性において自己の外部とつねに直面するというモチーフこそが、「主体化」の問題と繋がっているとと言えると論じた。

第二章「ファルスは証言する——「風博士」論」では、安吾がファルスの実作として書いた作品である「風博士」（『青い馬』、一九三二年八月）を中心に論じている。「風博士」の語りの道具立てには探偵小説的なものがとられていることについては既に先行研究の指摘があるが、そのような設定はむしろ、謎解きという形を用いることによって、「僕」の「証言」というモチーフを際立たせるためのものであるととらえた。

証言とは、通常過去の事件について述べるということの意味していると目される。だが、「風博士」が探偵小説と異なるのは、そこで過去の事件そのものが存在したか否かということ自体が、まったく判明ではない点にある。そのような不明性からは、事件の存在そのものを証言しようとする「僕」のひとり語りが焦点化されることになる。このファルスの奇妙さのひとつはその焦点化にあると思われるが、この語りによって言語の存在を前面化させ、言語自体の経験を際立たせることが、「風博士」におけるひとつの狙いであると考えた。このことは、安吾の他のファルス作品（『村のひと騒ぎ』（一九三二年一〇月）等）においても見られる傾向であり、また『FARCE に就て』において表明されていたファルス観と合致した発想を見ることが出来る。

だが特に「風博士」においては、過去の事件の存在を証言しようとする「僕」は、極めて滑稽な振る舞いをせざるを得ないことが描かれている。だが、そのように言語によって伝達されるという過程自体においてこそ、まさに「風博士」に関して起こったことが明らかにされているのである。ここから、証言するということは、過去に消え去った再生不可能な対象について述べるのではなく、むしろその証言のなかにおいて出来事の特異性や、他への還元不可能性が新たに明らかにされるプロセスであるということを示す述べた。

第三章は「坂口安吾と「新しい人間」論」として、安吾が「人間」の変化というテーマについて、同時代的なプロブレマティクを批判的に吸収しながら思考を進めていたことについて述べている。エッセイ「新らしき性格・感情」（『桜』、一九三三年五月）において言及されているソ連五ヶ年計画についてのイリヤ・エレンブルグのレポートは、フランスの文学雑誌『NRF』の一九三三年一月号に掲載されたものであったが、それ

を読んだ安吾に当時の生物学の言説に関連した問題意識を呼び起こしていたのであり、ここから安吾が共産圏の進化論的言説に興味を示していたことがわかる。

エレンブルグのエッセイは、それまでにない原理に従って教育・労働がなされるソ連においては、全く新しい考えや感情を持った「新たな人間」が生まれてくるのではないか、という展望のもとに書かれた文章であった。そしてそれと同様の発想が同時代の日本にも存在していたことは、ソ連の生物学を受容し紹介していた雑誌『唯物論研究』に掲載されていた諸論文を参照することで確認することができる。日本におけるそのような発想は、社会的な「環境」の影響により「動物」から「人間」への「進化」が引き起こされる、という図式として理解されていたのである。

しかし、安吾はこの「進化」の要因を「環境」には求めず、各自の「理知」的な努力によつてこそ「動物」性からの脱却が行なわれると考え、この進化論を「動物」が「人間」に進化するというテーマ自体は受け入れながらも、「環境」という要因については批判していた。だが、そのような問題意識を持つて望んだ長編小説『吹雪物語』（竹村書房、一九三八年七月）において安吾は、執筆を進めてゆくうち、「理知」の力による「動物」から「人間」への進化という図式そのものの不可能性と直面することになり、「意図を裏切った」失敗作として安吾自身はこの小説を位置づけるようになった。

だがその三年後に発表されたエッセイ「ラムネ氏のこと」（『都新聞』、一九四一年一月）において安吾は、それまでの発想からシフトし、「動物」から「人間」への「進化」という形ではなく、「理知」それ自体も可塑的なものとしてとらえ、それが拘束されている「不文律」からの脱却という形で「人間」の「変化」を主張していることが見てとれることになる。こういった発想の変遷を追うことで、一九三〇～四〇年代初頭の安吾における問題意識のあり方を、世界的な状況との関連において改めて浮かび上げさせることを試みた章である。

第四章では「バラック」と共同性——「日本文化私観」論——という題で、安吾がブルーノ・タウト『日本文化私観』になぞらえて執筆したエッセイ「日本文化私観」（『現代文学』、一九四二年三月）を扱っている。ここでは安吾が「文化」について触れていることに注目し、それまでは個人単位の「主体化」の問題について多く論じてきた安吾が、集団的な「共同性」の問題を扱っていることについての論述を試みた。

「日本文化私観」においては、「建築物」に対して「バラック」の意義が強調されていることが特徴である。「バラック」がブリコラージュ的な作業として問題とされていることを敷衍し、そこから「独自の形」の「生成」をいかにして作り出すかという問題を安吾が述べている点が、安吾にとって「文学」における課題とパラレルなものであったことをまず指摘した。

「日本文化私観」のメインモチーフは「独自の形態」の追求ということにあると言えるが、この「何物にも似ない」独自のものはあらかじめ存在している訳ではない。個性性はアプリオリに存在するのではなく、所与の条件を変化させるプロセスのうちにこそ現れるものとしてとらえられていることを論じた。そして、この問題が「文化」の問題と重ねられているのである。

安吾が「日本文化私観」で述べている「文化」とは、あらゆる既存の文化共同体のこ

とを語っているのではなく、「実質」や「必要」といったものにおいて引き起こされる、絶えざる「共同性」の変化の過程においてのみ描き出されるものとしてあったと言える。この意味において「日本文化私観」がきわどく触れている「伝統」や「共同体」の問題は、絶えざる問い直しと批判を必要とし、決して目的化しえない「共同性」に常に浸食されているのである。

そこから「日本文化私観」においては、「共同性」は「共同体」と異なっており、むしろ「共同体」を規定している歴史的社会的構造を「共同性」において変化させてゆくことにこそ、「独自性」と「主体化」の契機があるという議論を導き出した。

第五章「情報戦と「真珠」」では、一九四一年二月八日に真珠湾攻撃が行われていたその前後、安吾と目される語り手が何をしていたかという経験を、攻撃を行っていたいわゆる「九軍神」への雑感と交互に描いた小説「真珠」(一九四二年六月)をとりあげた。ここでは安吾において「戦争」というものがどのような意味を持っていたのか、またそこで繰り広げられた「情報戦」という問題に彼がどのような形で触れていたかという事柄について述べた。

「1 日付と情報」においては、先行論文に言及しつつ、まずこの小説が「十二月八日」のこのみではなく他の日付の出来事も数多く書き込まれていることに注目し、必ずしも「十二月八日」の出来事だけに焦点化されているのではなく、その前後の日も併せて描き込むことが重要であったことを指摘した。2 長距離飛行の果てに「においては、そこに描き込まれている複数の出来事の一例として、「巴里・東京百時間飛行」の新聞報道に象徴される、当時のメディアの長距離航空機に関する情報が「真珠」内に取り込まれていることなどに言及しながら、「真珠」というテキストそのものがそのような「情報」に充ちた世界を描き出すことで、「戦況」を想像的なものとして人々にとらえさせる状況が当時出現していたことを書いた。

そして「3 『不時着』する情報」においては、この小説「真珠」の中で伝えられる「情報」が、常にアクシデントの発生とともに描かれていることに注目し、それらが必ず発信者が意図した受け取り方とは異なる方向へと意味が導かれていることについて指摘した。さらに最終節である「4 真珠の粉」では、当時国家によって行われていた「特別攻撃隊」の神話化に対し、「真珠」で描かれているのは、むしろ彼らの追悼や物語化の不可能性であることを示した。

そこからこの小説は、「情報」として伝えられることで、それが描き出す対象それ自体が過剰なものとして伝えられてしまうということ、そして散文としての小説とは、情報に囲い込まれた世界においてその文脈を散乱させ換骨奪胎してしまうという特徴を持つており、「真珠」はそれを如実に体现した小説だったのではないかと結論づけた。

第六章「空襲と民主主義——『白痴』における主体化の問題」においては、坂口安吾の小説「白痴」(一九四六年八月)を一種の空襲小説としてとらえた上で、そこに描かれている事柄の中には、アジア太平洋戦争終結時に「空襲」とともに「民主主義」が入ってきたという、二〇世紀後半に顕在化した世界的テーマが焼き付けられているのではないか、という問題意識のもとに執筆されている。

二〇世紀がアメリカの世紀であったとはよく語られることだが、その覇権を可能にした原因には、アメリカが航空機を最も軍事的に活用できたからだということが挙げられる。二〇世紀のアメリカは航空産業の発展により「空」の空間を制したのであり、先のアジア太平洋戦争は、まさに現在まで続くアメリカの航空軍事力を最初に実体化した戦争だったと言える。

そして小説「白痴」が興味深いのは、この状況を空襲される側から描いていることだ。そこでは、主人公が空襲で「白痴」の女が死に、全てが焼き払われることを願いつつも、「白痴」を助けてしまうという物語が描かれている。世の中に絶望していた主人公・伊沢にとつて空襲とは世界変革のきっかけであり、それによつて自分自身も変化するためのチャンスとしてとらえられていた。だが、空襲が強要するスペクタクルの全体性と、そこにおける自分の「感覚」の喪失に彼は耐えられず、「白痴」を連れ逃走を試みる。そこにおいて伊沢は「白痴」の女から、自らが「知らないもの」と共にあることと、それと共に変化してゆくことの契機を感じ取るのである。

だが小説の最後で伊沢は、「白痴」に「豚」のような動物性を見出して再び意気沮喪してしまう。本論はこのことを戦後社会の問題と重ね合わせることで、これは「民主主義」なるものが常に理解不可能な動物性や欲望を抱え込むことをも意味している、と読み込んだ。そしてさらに、安吾が「墮落論」（一九四六年四月）などで述べていることとこの小説の結末を総合することで、「民主主義」という「カラクリ」（＝制度）自体も完璧なものでありうるはずはなく、むしろ常に人間が抱える「欲望」において制度には「穴」が見出されつつ、時代とともに変化するべきものであることが語られていると論じた。こういった観点から、「白痴」において安吾は、戦後社会における「民主主義」とその「穴」とともに生きることの問題を述べている、と結論つけた。

第七章「思考の地盤」を掘ること——「土の中からの話」論——においては、戦争終結後の安吾が「農地改革」に触発された形で土地制度について言及する文章が多くなつたことに注目し、戦後史学との同時代的な交錯を読みとりつつ、安吾が日本の戦後社会における課題を「中世」的な思考様式からの脱却と考えていたことと重ねて、彼の「土地」観について述べた。

ここで見出されたことは、安吾は「主体」の前提自体が「土地制度」の中で作り上げられると考えていたことである。つまり安吾は、「主体」が可能か否かという倫理性に行くよりもまず、「土地」という問題の持つ力に即して既に「主体」は構成されてしまっている、という機構にこそ注目していたのである。また一方、彼は同時代の言説である史的唯物論が主張していた、専制政治からの解放を古代からの中世の成立に重ねる発展図式に対しては異議を唱えていた。安吾によると、「土地」の問題は歴史の針を進めることで解消するのではない。それは「農民」たちの「狡猾さ」を形成しつつづけながら今後も残存し続けるであろう、と主張されていた。

「土の中からの話」（『道鏡』所収、八雲書店、一九四七年一〇月）という評論と説話が二パートつながられて書かれている作品においては、これらのモチーフが展開されている。そして各個の「主体化」は、結局この「土地」にまつわる社会構造を変化させることと切り離せないと安吾は述べているとした。

第八章「暴力と言葉」——「ジロリの女」をめぐる——では、小説「ジロリの女」(『文藝春秋』「別冊文藝春秋」、一九四八年四月)を取り上げた。この小説は、当時の「新円成金」の男を主人公に置き、最終的に彼が犯罪(拉致)をおかして捕まるまでの経緯を述べているものだが、この章ではそこにコミュニケーションと暴力の問題を読み込み論じている。

主人公の男をめぐる言語の問題では、「暴力のない理性」／「理性のない暴力」といった区別はなされておらず、言語を通じて、あくまで理性的に暴力が伝達されることが描かれている。ここからは、「暴力」が「金銭」や「言葉」の流通の内に存在していることが暴かれつつ、この小説にはそこから抜け出す回路を探る試みが読みとれることを示唆した。「ジロリの女」は主人公の手記として書かれており、読む者が小説自体に用いられている「言葉」の運用に気づかされるようになっていく。つまり、小説自体が「言葉」として書かれていることを明示している点において、そこで引き起こされている言語行為の次元に気づかざるを得ないようになっていくのである。

このことは、経済と法と小説とがジャンル別にそれほど明確に分けられない次元としての「言葉」というものを示唆しているように思われる。このような形で提示される言語行為の次元は、この小説においては暴力のエコノミーから逸れてゆく言語行為の可能性を探るものとしてあつたのではないだろうか、という問題設定のもとに書かれた章である。

第九章「法の切断——「桜の森の満開の下」論」の章は、安吾の小説「桜の森の満開の下」(『肉体』、一九四七年六月)について論じた。この小説の発表時期が戦後の制度変革が行なわれていた期間と重なることに注目し、そこから小説の意義を問い直そうとした章である。

これまで「桜の森の満開の下」は抽象的な説話としてとらえられてきたが、ここではまず、それが戦後の世相的なモチーフを比喩的に取り入れていることに注目した。さらに、この小説の冒頭部では「花見の習慣」という制度化した観点は歴史的なものであり、それ自体が自明なものではないことに言及している点に注目した。戦後の憲法制定や諸制度の改革の問題とこの小説を重ねることで、それらの問題が小説の中でも扱われていることが読みとれることを論じている。

それは、「桜の森の満開の下」において書かれているものが、制度が基盤としているにも関わらず、それらの制度が構成された後からは「蛇足」として位置づけられてしまふ、構想力の働きの暴き出される瞬間であるという点であつた。そのような構想力に対する切断として働く作用が、この小説には描かれていると言えるのである。制度にあつては「蛇足」として扱われつつも、そこに必然的に関わっている構想力と言語の働きを見出すことから、その大枠を変化させてゆく力を引き出すことが、「桜の森の満開の下」の提示している問題だと結論づけた。

第十章「トリック」の存在論——「不連続殺人事件」とその周辺——においては、まず終戦直後の「民主主義」導入に対し、安吾がどのような態度を取っていたかについて

触れた。安吾自身は、民主主義の理念そのものには反対の立場はとっていないかった。ただそれが国家の政体として制定され、それが上からの「統治の道具」として機能することを無批判に受け入れることに反対していたのである。彼自身はそこで、各自が「四囲の現実」を最小限の闘争回路としてみなし、まずその「現実」を変えてゆくこと、そしてそれが共同体を超えた「味方」や「友」へと波及してゆき、同様の試みが「四囲の現実」を超えて伝播してゆくことに可能性を見出していたと考えられる。

そしてそのような認識が、通常は探偵小説として読解される「不連続殺人事件」（『日本小説』、一九四七年八月〜四八年八月）にも読み込めることについて論を進めた。安吾が主張する、「不連続」において見いだされるべき「心理の足跡」の「トリック」とは、そこで「コンテキスト」と通常見なされているものをテキストとして前景化させ、それ自体を対象として認識することにおいてはつきりと「不思議さ」が浮き彫りになるものとしてあると言える。「トリック」は、それが自明なものとして埋め込まれているテキストの回路においては「自然」なものとして認識されている。しかし、その回路のエコノミーからずらして動かすことではじめて、「トリック」の存在が存在すること自体が判明となるのである。このような形で機能している、人間の認識の構造そのものを明るみに出すこと、それが「推理」という行為として描かれているのだ。

安吾における「主体化」とは、「現実」として指定される「コンテキスト」のもつともししい論理性と明証性を備えたトリックを見破り、そこでは実際に何が起きているのか、どのような不合理性をその論理が押し隠しているのかを発見する「推理」とともにあったことをここでは論じている。

最後の章である「結びに」においては、サルトルや「主体性論争」との比較対照をしつつ、安吾と「主体化」、そしてその「個体化」との関係について説明している。「個体化」とは人間の意識とは関係なく、無数の「共同性」において取り結ばれる関連性をそう呼ぶのであり、「主体化」はそれとの関係を構成しつつある側、そして未だその力が解放されていない無数の「個体化」の運動が様々な束縛をどう切断しあるいは変化させてゆくかの舵取りをする、発見的かつ仮設的な運動として位置づけられる。

安吾の「政治」観は個体同士の互いの還元し難さからこそ発生しており、しかもそれでいて他者を人間が必要とするところに根ざしている。それらの他者の間で編み出された「政治」は常に「方便」として作られるが、あたかもそれ自体が自律的であるかのようには転倒してとらえられてゆくことを安吾は常に批判している。一方、「文学」は個体が自らを固定的に定位することの不可能性に根ざしながらも、にもかかわらず、その中でいわば問いの運動体を構築してゆくプロセスを内包しつつ開示する、言語行為の問題としてとらえていると言えるだろう。坂口安吾の言語活動の底流においては、それらの諸力を角逐させ、衝突させる所から絶えず生み出されてゆくべき「主体化」の運動が、一貫して必要とされ、編み出されていたと言えるのである。

以上